
あの双子がマイソロ3の世界へ！？

緋月雛菊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの双子がマイソロ3の世界へ！？

【Nコード】

N8218W

【作者名】

緋月雛菊

【あらすじ】

ただ単に書きたかっただけの小説です。

舞台はルミナシア。

其処に転移した奥村兄弟と、双子のディセンダーの兄妹がメインです。

く世界樹の夢く

世界樹の恩恵を受け、様々な生命が暮らす世界は幾千、幾万もある。その中に存在する世界ルミナシア。

今、ルミナシアではある事が起こっていた。

世界規模で行われているマナが結晶化した物質『ホスチア星晶』を巡る争い。小さな国々は大きな国々に取り込まれ、世界に張り巡らせている星晶は数が少なくなっている。

そして、採掘跡地で見られる生物変化現象。

——世界樹内部にある生命の場。

其処ではある存在が生まれた。

世界樹の夢そのものである、世界樹の勇者ディセンダー。

2つの夢が具現化し、ヒトの姿をとろうとする前、世界樹は夢の片割れにあることをさせた。

それは、ルミナシアの世界樹が封じ込めた『世界樹の種子』に触れる事。

触れた影響で片割れには、生命の設計書『ドキュメント』を見る力、肉体に負担をかけることなくかなり細かく展開する事が出来る力、『封じ込めた世界の姿』を見つけ出す力を携わった。

そして、世界樹は2つの夢を双子と定め、世界に解き放った。

夢を解き放った後、世界樹は2人の助けになるよう、異世界から同じ双子の存在を喚んだ。

ブローグ

——正十字学園内の旧男子寮の食堂。

「兄さん、一体何してるの？」

「ん？テイルズのマイソロ3のゲームだけど？」

銀色のPSPを持っていて、燐が答えると雪男は小さく溜息をつく。

「もう就寝時間だよ。明日遅刻しても知らないよ？」

「いーじゃねえか。どうせ明日は普通授業だけだしよお」

「よくない！」

雪男が叫ぶと燐はPSPをスリープ状態にし、大きく伸びをする。

「あーあ、ホントにマイソロの世界があつたらなあ」

「バカな事言つてないで、少しは勉強してよね」

「へいへい」

燐が立ち上がろうとしたその時、空間に歪みが生じた。

「何だ！？」

警戒心を露わにした燐が俱利伽羅を構えると青い炎が彼を包む。

「判らない、気をつけて兄さん！」

雪男は銃を構えた。

途端、歪みは光を放ち2人を包んだ。

「うわっ！？」

「！？」

光の波に抵抗出来ず2人は歪みに呑み込まれた。

そして光が消え、視界に映ったのは——

第一章・始まりの音色

——世界樹の恩恵を受け、様々な種族が暮らす世界ルミナシア。その世界に存在する中立ギルド・アドリビトムの拠点である船、バネルティア号。

甲板で空を見上げているアドリビトムに所属する焰と見紛う程の赤髪を持った紅い瞳、白い肌の少年エヴァ。

「兄ちゃん。此処にいたの？」

甲板に現れた雪と見紛う程の銀髪を持った紅い瞳、白い肌の少女イヴ。

2人は双子の兄妹で、此処に来るまでの記憶がなかった。

記憶が戻るまで2人はアドリビトムでギルドの仕事をしていた。

「…世界樹を見ていたんだ」

「世界樹…」

イヴは兄と同じ方角を見る。

其処には巨大な樹——世界樹があった。

「不思議だよね…。私達は何も知らないのに世界樹を見ると…世界樹がお母さんって思えるなんて…」

ホスチア

「何でだろうな…、此の世界も、ホスチア星晶の事も覚えてない僕達が世界樹を見ると…な」

小さく笑い合う兄妹はふと上空に目を向ける。

すると上の空が歪に見えた。

「兄ちゃん、あれ何？」

「さあ？」

と、その時。

「「うわあああああああつ！！」」

絶叫と共にその歪みから2人の少年が落ちてきた。

「兄ちゃん！人！人が落ちてくる！」

「判ってる！手伝えイヴ！」

「う…うんっ！」

エヴァとイヴは近くに干してあったシーツを広げると少年達の落下地点を確認し、移動すると同時に少年2人はシーツの上に落ちた。

「いてて…。一体何なんだよ…」

「そんなの、知らないよ…」

黒髪に刀を持った少年と同じ黒髪で銃を持った少年にエヴァとイヴは啞然とする。

少年達は見たこともない服装に身を包んでいたからだ。

「あ…あの…、大丈夫ですか？」

恐る恐るイヴは2人に話しかける。

「ん？ああ、大丈夫だ」

その言葉にエヴァは安心したように笑う。

「よかった…。いきなり空から落ちてきたからな。僕はエヴァ」

「私はイヴ。エヴァ兄ちゃんとは双子なんだ。あなた達は？」

「俺は奥村燐。こっちは俺の弟の…」

「奥村雪男です」

初めて聞く名前にエヴァは戸惑う。

「えっと…燐と雪男…でいいのか？」

「ええ。ところでエヴァさん、此処は？」

「此処はアドリビトムの拠点のバンエルティア号の甲板」

「アドリビトム…？」

「ふみゆ？燐はアドリビトムの事知ってるの？」

「知ってるも何も、マイソロのゲームに出て来るギルドの名前だろ

！？って事は此処は俺達のいた世界じゃないって事か？」

「げ…げえむ？いた世界じゃない？ふええ…」

だんだん混乱してきたらしくイヴは髪を手櫛ですく。

「…エヴァ君、イヴ。どうやら彼等は訳ありのようね」

「アンジュさん！」

甲板に現れたアンジュに2人の混乱が少しだけ収まった。

「まさか、話聞いてたの？」

「あんなに騒いでいたんだもの。聞こえるに決まっているわ」
アンジユは燐と雪男に向き合う。

「はじめまして。私はこのギルドのリーダー、アンジユです」

「俺は奥村燐。んでこっちが弟の雪男」

「燐君と雪男君ね。あなた達、空から落ちてきたなんて…まるでエヴァ君とイヴみたい。でも2人とは違って記憶はハッキリしているよね」

「記憶がハッキリとは？」

疑問を感じたらしく雪男はアンジユに訊ねる。

「2人は自分の名前と双子の兄妹だって事以外の記憶が無いの。此の世界の事や星晶の事も覚えていないのよ」

「へえ…」

「つまり2人は記憶喪失…と云う事ですか？」

「そういう事よ。…此処で話すのも何だし、中へ入りましょうか。詳しい話は其処で」

「あ、はい」

先に中に入るアンジユに続いて燐、雪男、エヴァ、イヴも中に入る。ホールに入ると桃色の髪の少女と小さな生物が隣の通路から出て来た。

「あら、ナイスタイミングね。ロックス、お客様にお茶をお出ししてもらえるかしら？」

「分かりましたアンジユ様。丁度おやつの時間ですから、お茶菓子も持ってきますね」

ロックスはいそいそと通路を戻る。

「エヴァ、イヴ、今日のおやつはティラミスだよ」

「そうなんだ…。あ、そうだ」

イヴは燐と雪男に向き合う。

「燐、雪男。彼女はカノン。アドリビトムのメンバーなの。カノン、刀を持っているのは燐で銃を持っているのは雪男。彼等は兄弟なんだよ」

「はじめまして。奥村雪男といます。こっちは兄の奥村燐」

「はじめまして。私はカノン・グラスバレー。ええつと…」

「燐でいいぜ」

「僕も呼び捨てで構いませんよ」

「じゃあ、燐、雪男。よろしくね」

と、その時ロックスが通路から出て来た。

「皆さん、お茶の準備が出来ましたよ」

「雪男、食堂に行こう。話は其処でしょう」

「分かりました」

「行こ！燐、カノンノ！」

「ああ！」

「うん！」

はしゃぐイヴ、カノンノ、燐にエヴァと雪男は苦笑を浮かべた。

第一話・気が合う2人

食堂のテーブルにはロックスが準備した菓子とお茶があった。

「はい、今回のお茶はシナモンティーですよ」

「わあ…。いただきます！」

イヴは手を合わせて言うと言ティラミスを口に運ぶ。

「うんっ！甘くてほろ苦くて美味しい！」

「ほんとだ！うめえ！」

「うん！美味しい！」

「お嬢様、燐様、イヴ様のようにちゃんと「いただきます」と言ってもらわなくては困ります」

「あ、ああ、わりい。いただきます」

「あ、うん。いただきます」

2人の様子にエヴァは小さく笑うと表情を引き締め、雪男に向き合う。

「雪男、お前たちは何処の世界の人間なんだ？」

「地球という星の人間だよ。何でこの世界に来たのかは判らないが、此処に来る以前、空間に異常が生じて此処に飛ばされたんだ」

「空間に異常？」

「ああ。空間が歪んだかと思ったら光が溢れて、この世界の空に来たんだ」

「そうか…。異世界の住人のお前たちはアドリビトムやバンエルティア号の事を知っているみたいだが…。お前たちの世界にもあるのか？」

「いや、ない。アドリビトムやバンエルティア号は実在しないモノで、想像のモノとして僕らの世界では認識されているんだ」

「実在しないモノ…ホスチア星晶もか？」

「ない。逆に人体に悪影響を及ぼす鉱石はあるけどね」

エヴァは聞いた話を頭の中でまとめる。

一方、イヴは燐と色々話していた。

「そう言えば、燐は剣士なの？」

「まあ、そんなもんだな。イヴは何だ？」

「私、今はガンマンだよ。カノンノは魔法剣士で兄ちゃんは今のとこビジョップなんだ」

「イヴは雪男と同じで銃を使うのか」

「うん。でも、弓や剣も杖も拳も使うよ。私と兄ちゃん、転職可能だから」

「へえ、すげえな。アドリビトムの仕事はやっぱりハードなのか？」
菓子を食べ終えたらしく、イヴはフォークを皿の上に置く。

「ハードだけど、とっても楽しいよ。もしかしたら記憶が戻るきっかけもあるかもしれないから」

「そうか。記憶、戻るといいな」

「うんっ！」

笑顔で頷くとイヴはシナモンティーを飲み干す。

「そつだ。燐と雪男もアドリビトムに入りなよ。行く宛も帰る宛も無いんでしょ？」

突然のイヴの発言にエヴァは彼女の頭を軽く叩く。

「あだっ！」

「いきなり言うな。2人とも戸惑うだろ」

「アドリビトムに入れるのか!？」

「兄さん」

子供のように喜ぶ燐に雪男は小さく溜息をつく。

「だってよ、このまま此の世界を旅したって帰る方法はわかんねえだろ? だったら任務をこなしながら帰る方法を探したほうがいいだろうが」

「…実戦目当てじゃないよね？」

「うっっ！」

虚を突かれた燐は冷や汗を浮かべる。

「…まあ、このまま待機しても元の世界に帰れるわけがないし…」

「じゃあ決まりだな！これからよろしくな、エヴァ、イヴ、カノンノ！」

「…はあ」

溜息をつく雪男の肩をエヴァは慰めるように叩く。

「雪男も苦労してんだな。兄で」

「エヴァもか？」

「ああ。僕は妹だけだな」

「僕達、兄弟苦労で気が合いそうですね」

「ははっ、そうだな。苦労人同士、仲良くしよう、雪男」

「ああ。よろしく、エヴァ」

苦労人の2人はしっかりと握手を交わした。

そして、記憶喪失の兄妹と異世界から来た兄弟のアドリビトムの生活が始まる。

第二話・古の焰と青い焰

燐と雪男はアドリビトムに入る為に初級任務をエヴァとイヴと共に行っていた。

場所はコンフェイト大森林。

任務は其処にいる植物系の魔物「プチプリ」の退治だ。

「なあ、イヴ。確かプチプリは火に弱いんだよな」

「そうだよ。だから私、魔術師に転職したの。エクスプロードとレイジングミスト使えるし」

「じゃ、俺も焰を…「兄さん」…はい、使いません」

物凄い形相で睨み付ける雪男に燐は縮こまる。

「燐って魔法使えるの？」

「魔法ってワケじゃねえんだ。ただ、焰を扱えるというかなんというか…」

「へえ…。使わないの？」

「上手くコントロール出来ねえからな。人を殺す事も出来る力だからさ」

「始めは誰だっけそうだと思うよ。私と兄ちゃんは記憶が無いけど、戦い方を覚えてるし…。自分のペースでコントロールすれば、きっと燐の力は応えてくれるよ」

「イヴ…」

何気に感動したらしく燐は目に涙を浮かべながらイヴを見た。

苦笑を浮かべるエヴァは、溜息をつく雪男の肩に手を置く。

「ま、任務を遂行しようぜ、雪男」

「…そうだね」

2人は後ろで楽しそうに話す2人を見た途端、頭痛に悩まされそうになった。

サクサクと木葉を踏みしめる2人の足音。

「…ねえ、燐」

「…ああ、イヴ」

「「兄ちゃん達／雪男達」とはぐれた「ね／な」」

イヴと燐は相手を深追いし過ぎて、エヴァと雪男とはぐれてしまった。

「…どうする？」

「…判つてたら行動してるだろ」

「確かにそだね…」

2人は溜息を吐き出す。

だが感じた気配に警戒の色を滲ませる。

ガサガサと動く茂み。

「…イヴ、バックアップ任せたぜ」

「うん！」

大きく動く茂みから現れたのは巨大なプチプリだった。

「デカプリ！でも、相手に不足はないよ！」

「そうだな。いくぞ！」

燐は被魔剣「俱利伽羅」を握り締めてデカプリとの距離を縮め、イヴはファイアボールでデカプリを囲むプチプリを退治した。

デカプリの胴体を切り裂くと距離を置き、攻撃をかわす。

「燐！こいつ、火に少しだけ耐性が出来てる！エンシェントノヴァだけじゃ倒せない！」

スペクトルズでデカプリの情報を調べたイヴが叫ぶ。

「そうか！此処は彼処じゃない…力を使っても平気な筈だよな」

「恐れないで、行動すればきっと燐の力は応えるから！頑張っ！」
燐は強く頷く。

そして青い焰が燐を包んだ。

「うおおおおおっ！」

焰を纏った刀身をデカプリの巨大な葉に斬りつけると、葉は一瞬で燃え尽きた。

「今だ、イヴ！」

「うんっ！古に生まれし浄化の焰よ！我が声に応え、遙か時空の果てより来せしたまえ！エンシェントノヴァー！」

詠唱が終了したのと同時にデカプリに焰が降り注ぐ。

焰は致命的な傷を負ったデカプリを焼き尽くすと消え去った。俱利伽羅を鞘に納めるのと同時に纏っていた青い焰は消えた。

「な…なんとか勝ったあ…」

「そうだな…。流石に疲れたぜ」

地面にへたり込むと、急に此の状況が可笑しく感じた。

「ぶっ…」

「くっ…」

「「あつははははは！！」」

笑いを堪えきれなかった2人は思い切り笑った。

「あははっ！何か凄く笑えるね！」

「ははっ！そうだな！」

2人は息を切らせながらも笑うと、立ち上がる。

「んじゃ、そろそろバンエルディア号に戻るか」

「その前に、兄ちゃんと雪男と合流しないとね…。怒られるけど」

「…そだな」

一気に冷えた空気に2人は暗い笑みを浮かべた。

その後、エヴァと雪男と合流したイヴと燐はすっかり油を絞られた。

第三話・報告

バンエルディア号に戻った4人はアンジユに任務達成の報告をした。

「四人とも、お疲れ様」

「おう！簡単だったぜ！」

「けど、兄さんは勝手に行動し過ぎだよ」

「でもさ、異世界で戦闘慣れしているだけはあるよね」

「ああ。無駄のない動きでこっちも行動し易かったよ」

イヴとエヴァが誉めると燐は無邪気に笑い、雪男は少し照れた。

「さて、次の任務の用意に時間がかかるからまでに他のメンバーに挨拶してきたら？」

「みんな戻って来たんですか？」

「ええ。船の案内ついでに挨拶していらっしやい」

「判りました。燐、雪男、いこっ！ほら兄ちゃんも！」

「わかったから引つ張るな！」

明るくイヴは言うつとエヴァの服を引っ張りながら走り出す。

エヴァの方は妹を叱りながらも小さく笑いながら走る。

「ああ言いながらも、エヴァも満更じゃないようだな」

「しえみさんみたいに明るいよね、イヴは」

「確かにイヴはしえみみたいに明るいよな。けど、しえみには無い明るさもあるのが判る」

「そうだね」

「燐！雪男！早く早く！」

自分達を呼ぶ声に燐と雪男は小さく笑い、先に行った兄妹の後を追った。

戻ってきたメンバーとの挨拶を済ませ、船内を歩いている4人。特に燐は目を輝かせながら歩いていた。

「―――すげえ… ホントに現実なんだよな。夢じゃないよな？」

「現実だよ。ほら」

―――バシッ！！

燐の頬を平手打ちで叩いたイヴ。

「いゝっでえええええっ！！」

絶叫に近い悲鳴をあげた燐の頬には綺麗な手形が残っている。

「あ、ごめんっ！本気じゃなかったんだよ！？」

「マジで！？本気で叩いたとは思えねえ痛みだぞ！」

「ごめんなさい、ごめんなさいっ！」

慌てふためきながら謝るイヴと、あまりの強さに啞然としている燐。その様子にエヴァと雪男は苦笑を浮かべるしかなかった。

「…余計、苦労が増えそうだな」

「大変だな、エヴァも」

「雪男程ではないと思うよ」

第四話・それぞれの世界

——次の任務はルバーブ峠に生息する『ガルダ』退治。

メンバーはエヴァ、イヴ、燐、雪男、カノンノの5人。

カノンノは見届け役として、任務に参加した。

「ガルダかあ…私達と同じ入隊試験だね」

「そうなのか？」

「うん。私と兄ちゃん、カノンノでガルダ退治に行ったんだ。今回、カノンノは見届け役だから戦闘には参加しないけどね」

「ガルダって、でかい鳥の魔物だろ。風属性の」

「よく知ってるね。『げえむ』って不思議な物のおかげなの？」

まあな、と燐は笑って答える。

「イヴ、燐、そろそろルバーブ峠に入るよ！」

カノンノの声に2人は慌てて、先に行った3人の後を追いかけた。

——その頃、正十字学園、被魔塾。

登校時間になっても来ない燐と雪男に塾生達は疑問を抱いていた。

「燐と雪ちゃん、来ないね」

「ホンマやなあ。先生は寝坊するような事はせんし…。何かあったとちゃうか？」

話し合う杜山しえみと志摩廉造。

「確かにおかしいですね」

「奥村はともかく、先生が来ないのは確かにおかしいな」

肯定する三輪子猫丸と勝呂竜士。

「別どうでもいいけど、先生がいないと話にならないものね」

冷たく言う神木出雲。

そして、被魔塾生は教室を抜け出して、燐と雪男が寝泊まりをしている旧男子寮に向かった。

——ルバーブ峠に辿り着いたエヴァ、イヴ、燐、雪男、カノンノ。彼等の目の前に巨大な鳥の魔物『ガルード』がいた。

「この試験が終われば、燐と雪男は正式にアドリビトムの一員だよ。頑張って」

カノンノの言葉に2人は頷く。

エヴァはヒートダガー、イヴはスターライトスタッフ、燐は倶利伽羅、雪男は二丁拳銃を構えた。

「来るよ！」

イヴの声と同時にガルードが襲いかかってきた。

「蒼破刃！」

「魔神剣！」

エヴァと燐は遠距離系の技を繰り出し、雪男はイヴに教えてもらったチャージバレットとアサルトバレットのコンボ技を繰り出した。

イヴはシャープネスを発動させる。

「うわっ！」

「雪男！」

「癒しの波動よ、ファーストエイド！」

攻撃を受けた雪男にイヴは回復魔法をかける。

「うおおっ！魔神空牙衝！」

青い焰を纏った燐がガルードに切りかかり、倒す。

「これでも喰らえ！牙突連撃！」

シャープネスで攻撃力が上がったエヴァが秘技でとどめを刺す。
そして、4体のガルーダを倒し終わった。

「うん、見届けました。試験、合格だよ！」

嬉しそうにカノンノが言う。

「じゃ、バンエルティア号に帰ろう！みんなが待ってるよ！」

「ああ！」

にこにこと笑いながらイヴ、燐、カノンノは帰路につく。

その様子を見ながらエヴァと雪男は先に行った3人の後を追ひ、バンエルティア号に戻った。

——旧男子寮についた被魔塾生メンバーは寮中を捜すが、燐と雪男は見つからなかった。

見つかったのは食堂に置き去りにされたティルズのマイソロ3が入ったPSPだけ。

志摩がPSPのスリープモードを解除すると、燐がプレイしていたマイソロのデータがそのままの状態だった。

ゲームの世界に行ったなんて、彼等は知らない。

第二章・心を奏でる音色

試験を終え、正式なアドリビトムメンバーになった燐と雪男。その後、色々な任務をエヴァとイヴと共にこなしていった。

記憶喪失の双子の兄妹と異世界から来た双子の兄弟は互いに親睦を深めていき、特にイヴと燐は毎回の任務で共に行動するほどに仲良くなっていた。

エヴァと雪男は苦勞が増えたと感じているらしく、同じギルドメンバーで苦勞人のリッドと苦勞話をするほどの仲になった。

ある日、イヴ、エヴァ、燐、雪男が任務から帰ってきた時、カノンが駆け寄ってきた。

「4人共！ロックスがおやつだつて言ってるよ。食堂においでよ！」
「判った。イヴと燐と雪男は先に食堂に行つて。僕はアンジュに報告してから行く」

「僕も残るよエヴァ。兄さん達は先に行つて」

「じゃ、先に行つてるね、兄ちゃん」

「先に行つてるからな、雪男」

同時に言つたイヴと燐はカノンと一緒に食堂へ行つた。

「…イヴと燐、ほぼ同時だったな…」

「そつだね…」

微妙な笑みを浮かべたエヴァと雪男はアンジュへ任務達成の報告をしようとカウンターへ向かつた。

——食堂ではロックスが作った菓子を囲んでイヴ、燐、カノンが席についていた。

「はい、今日のおやつはシナモンロールですよ」

「いい匂い！うん、美味しい！」

「カノンノ、いただきます言わないとダメだよ」

先にいただきますを済ませたイヴが言う。

「あ、そうだった。いただきます」

「イヴ様、根についておるんですね」

「あはは…」

イヴは苦笑しながらシナモンロールを食べた。

「イヴは、純粋な馬鹿だからな」

食堂に雪男と共に来たエヴァが言うと、イヴは頬を膨らませる。

「兄ちゃんだって言えないでしょ？」

「まーな。僕達は双子だしな。…イヴだけ何か見えてるところは違うけど…」

「……………」

エヴァはぼつりと呟きを零した。

その呟きにイヴは俯く。

「…？」

隣と雪男は首を傾げながらエヴァとイヴを見据えた。

第一話・会話

記憶喪失の双子と異世界から来た双子がアドリビトムで働き初めてから数日後。

アドリビトムにはペカン村から来たナナリーとハロルド、気晴らしにエヴァ、イヴ、スタン、燐が闘技場で倒したコングマンとスタンの妹のリリスが入隊し、バンエルティア号は更に賑やかになった。イヴは燐と居るときが多く、話の内容は燐と雪男のいた世界についてだった。

「——と言っわけなんだ」

2人はホールでロックスが持ってきてくれた菓子と紅茶を嗜みながら話していた。

「そう…なんだ…。…燐と雪は青焰魔の落胤って言われていて、監視されていたんだ…」

燐の話を聞いたイヴはそつと目を伏せる。

イヴは燐と雪男の身の上の話を聞いたのだ。

「…悲しいよ。生まれてきたのに、ちょっとヒトとは違う能力を持つただけで軽蔑の目を向けられるなんて…」

「…イヴはホントしえみに似ているな」

思わず燐は呟く。

「しえみ？」

イヴはキョトンとした表情で燐を見据える。

「ああ、俺の同級生で被魔師の見習いなんだ。イヴみたいに優しい性格だから、すぐに打ち解けるんじゃないかなあ…って思ってたんだ」

「へえ…合ってみたいな」

イヴは無邪気に言う。

と、2人の前をクレアが通り過ぎた。

「あ、クレア」

イヴがクレアを呼び止める。

「あら、イヴ。燐と話をしていたの？」

「うん。今日は燐と雪のいた世界の話。クレアはどうしたの？」

「ヘーゼル村への支援物資を送ってもらいたいからアンジュさんに依頼をしておくの」

「ヘーゼル村って、確かウリズン帝国に支配された村だったよな。エヴァから聞いた」

燐の言葉にクレアは少し暗い表情になる。

「あ、わりい。訊いちやいけなかったな」

「ううん。燐は悪くないから気にしないで」

クレアはそう言つと、アンジュのいるカウンターに向かった。

燐とイヴはじつとクレアを見据え、視線を外すと再び会話に専念した。

第二話・紅い瞳の双子

隣とイヴが会話を交わしていた頃、エヴァと雪男はウィル、ミント、ルビア、カノンノと話をしていた。

「…つまり、エヴァとイヴさんは空から降りてきたのですか？」

「うん。光に包まれながらフワフワって」

カノンノは頷きながら言う。

話していたのはエヴァとイヴがカノンノと初めて会った時の話。

「初めてエヴァとイヴに会った時、何処かへ逃げてる途中かと思っ
たの。エヴァ、眠っていたイヴを大事そうに抱いていたから」

カノンノの言葉にエヴァは俯く。

「僕は戦い方と名前、イヴとは双子だってしか覚えてなかったから
な…。一体、僕は何処に行こうとしたんだろう…」

「でも、イヴは何でルバーブ連山で目覚めなかったのかしら？」ル
ビアは聞いていて疑問を感じた。

初めてカノンノと双子が出会った時、イヴは昏睡状態に陥っている
ように眠っていたのだ。

目覚めたのはバンエルティア号について、エヴァがオタオタ退治に
出ていた時だった。

「ふむ…。もしかしたら、世界樹が光ったのと因果関係があるかも
しれないな」

「ウィルさん、どんな光だったのですか？」

雪男はウィルに訊ねる。

「世界樹がいきなり光り出した時は白かったんだが、一瞬、赤い光
もまじったんだ。イヴの瞳と同じような色の」

エヴァとイヴはメンバーであるイリアと同じ赤い瞳だが、イヴの瞳
はエヴァとイリアとは違い、透明感のある透き通った、誰もが見た
ことのない綺麗な紅。

「それに、イヴ、眠っている時よく何か言ってるのよ。本人には記

憶に無いらしいけど」

「どんな？」

「はつきり聞こえたのは『待つて』とか『行かないで』かな。…後は小さくて聞こえなかったけど…。とにかく、エヴァじゃない、私達でもない誰かを呼んでいるような事を言っているの」

ルビアはそう言つと、燐と会話しているイヴを見る。

明るく燐と話を交わしているイヴが、何故か雪男は悲しく思えた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8218w/>

あの双子がマイソロ3の世界へ！？

2011年10月29日14時10分発行